

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をたふ。島々の數を盡くして、峙つものは天をさし、臥すものは波に腹ばふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左に分れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹き撓めて、屈曲むのづからためたるが如し。その氣色皆然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を振るひ言葉を盡くさん。

雄島が磯は、地續きて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穂・松笠など打ちけぶりたる草の庵靜かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく立ち寄るほどに、月海に映りて晝の眺めまた改む。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて風雲の中に旅寝すること、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとくさす 曾良
 千は口を閉ちて眠らんとして寝られず。宿庵を別る時、素堂、松島の詩あり。原安適、松がうらましの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。且つ、杉風、濁子が發句あり。

平泉

十二月平泉と志し、あねはの松、緒たえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉東・鶺鴒の行き交ふ道そこともわかず、遂に道路みながへて、石巻といふ湊に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船大江につどひ、人家地を争ひて竈の煙立ち續けたり。思ひかけずかゝる所にも來たれるかなと、宿借らんとすれど、更に宿賃す人なし。漸くまどしき小屋に一夜を明かして、明ければまた知らぬ道迷ひ行く、袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の菅原などよそ目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。其の間二十餘里ほどと覺ゆ。

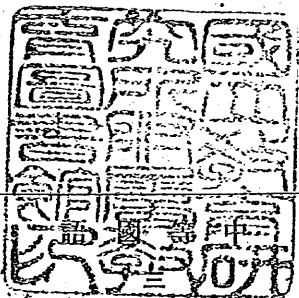
中等國語 三

文部省

文部省調査普及局刊行課寄贈

(中) ¥ 1.00

(12)



昭和二十一年七月二十二日印刷 同日翻刻印刷
 昭和二十一年七月二十六日發行 同日翻刻發行
 【昭和二十一年七月二十六日 文部省検査済】

【中】定價壹圓

著作權所有 發行者 文部省

發行者 東京都神田區岩木町三番地
 中等學校教科書株式會社

代表者 加野 庄 吾

印刷者 東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
 大日本印刷株式會社

代表者 佐久間長吉郎

發行所 中等學校教科書株式會社

APPROVED BY MINISTRY
 OF EDUCATION
 (DATE Jul. 22, 1946)

教科書番號 12ノ三

目録

文法篇

〔文語の續き〕

一 文語助動詞の接續と活用(一)……………一

二 文語助動詞の接續と活用(二)……………八

三 文語助動詞の接續と活用(三)……………十二

四 文語助動詞の接續と活用(四)……………十六

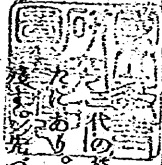
五 文語助動詞の種類と用法……………二十二

附表

第一表 口語及び文語助動詞活用表……………三十四

第二表 口語及び文語助動詞接續表……………三十五

第三表 口語及び文語助動詞接續表……………三十六



三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こな
たにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を
残す。先づ、高僧に登れば、北上川南部より流るゝ大
河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高僧の下にて大
河に落ち入る。泰衡らが舊跡は、衣が關を隔てて南部
口を差し堅め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣す
ぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて
山河あり、城春にして草青みたりと、笠打ち敷きて時
の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に釜房見ゆる白毛かな 曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を
殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶
散り失せて珠の扉風にやぶれ、黄金の柱霜雪に朽ちて、
既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新たに圍んで堊
を覆うて、風雨を凌ぐ。しばし千載の記念とはなれり。
五月雨の降り残してや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基に
して、殊に清閑の地なり。一見すべき山人々の勸むる
によりて、尾花澤より取つて返し、その間七里ばかり
なり。日未だ暮れず。麓の坊に宿借りおきて、山上の
堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり土石老
いて、苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞え
ず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寥とし
て心澄み行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川

最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。恭點・
隼などいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、果
ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に舟を下
す。これに稻積みたるをや稻舟といふならし。白絲の
瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人掌岸に臨みて立つ。水
漲つて舟危し。

五月雨をあつめて早し最上川

象 潟

を加へて、地勢魂を憐ますに似たり。
汐越や鶴脛濡れて海涼し

江上水陸の風光敷を盡くして、今象潟に方寸をせむ。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その際十里。日影や、かたぶく頃、潮風眞砂を吹き上げ、雨膝臙として鳥海の山隠る。暗中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、海人の苫屋に膝を入れて、雨の霽るゝを待つ。その朝、天よく晴れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。先づ、能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向かふの岸に舟を上れば、花の上漕くと詠まれし櫻の古い木、西行法師の記念を残す。寺を干満珠寺といふ。

この寺の方丈に坐して籠を巻けば、風景一眼のうちに盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はひやゝの關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて波打ち入る所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、面影松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみ

文 法 篇

〔文語の續き〕

一 文語助動詞の接続と活用(二)

〔一〕 本を 讀む。

〔二〕 本を 讀まず。

〔三〕 本を 讀みたり。

〔四〕 本を 讀ましむ。

〔五〕 本を 讀ましめたり。

〔六〕 本を 讀ましめず。

〔七〕 本を 讀ましめざりき。

問題1(イ)右の例文を、意味の上からそれと比較してみよ。

(ア)その意味の違いは、どの部分で表され
てゐるか。

(ハ)それらの例文には、助動詞が幾つ用
ひてあるか。

(ニ)助動詞に活用の有ることを、右の例文

に就いて示せ。

〔三〕 文語の助動詞も、用言に附いていろゝの意味を加へてその叙述を助け、或は證言などに附いてこれに叙述する意味を加へる。さうして用言に附く場合には、どんな活用形に附くかが助動詞ごとにきまつてゐる。随つて、文語の助動詞も、口語の場合と同様、どんな語に附くか、どんな活用形に附くかによつて、幾つかの種類に分けられる。

問題2 口語の助動詞は、接続の仕方から見て幾種類に分けられるか。

〔三〕 文語の助動詞は、口語のに比べるとその数が多く、又、口語のとは違つた語を用ひることが多い。

又、活用に於いても口語と違つた所が多い。

〔四〕 す さす

〔三〕 手紙を 書く。 〔試験を 受く。〕
〔手紙を 書かず。〕 〔試験を 受けず。〕
右の言ひ方を比べてみよ。この「す」「さす」は口語の「せる」「させる」に當るものである。

問題3 口語の助動詞「せる」「させる」はどんな意

味を表す語か。

「す」「さす」は次のやうに活用する。

- (一) われに 知らせず。 汝に 見させむ。
- (二) 汝に 知らせたり。 外を 見させたり。
- (三) かれに 知らせず。 人を やりて 見させむ。

(四) 遂に 知らずる 敢へて 見させる
時 なし。 こと なし。

(五) その 由 知らず 見させれど 人影も
れども 聞かずし なし。
て やみぬ。

(六) われに 知らせよ。 早く 見させよ。

問題4 右の例文を基にして、「す」「さす」の活用
を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す						
さす						
主な用法	速なるに 遅なるに	タリに ナリに	言ひ 時	逆なるに 速なるに	下モに 命の意 味で言ひ 切る	

問題5 「す」「さす」はどんな活用形に附くか。例
文によつて調べてみよう。

問題6 右の例文に於いて、「す」が附いてゐる動
詞は何活用か。「さす」が附いてゐる動詞は
何活用か。

「す」「さす」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附
かない。次の語の(一)(二)の類の動詞には「す」が付き、
(三)の類の動詞には「さす」が附く。

- (一) 打つ 喜ぶ 取る 養ふ 移す 死ぬ
あり
- (二) 強ふ 見る 預く 來 出づ 射る 受く
作業す

問題7 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何
活用か。

○サ變動詞に於いては、その未然形に「さす」が附い
て、例へば「旅行せさす」「理會せさす」となるのが普
通であるが、「旅行さす」「理會さす」のやうな言ひ方
をすることもある。

「しむ」「しむ

讀み書きを 習はしむ。
弟を 行かしめむと 欲す。

團結を 強固ならしめたり。

鬼神をも 泣かしむる 行動なり。

人を 樂しましむれど、己は 樂しみを 求め
ず。

われに 言はむと 欲する ところを 言はし
めよ。

右のやうに、「しむ」「は」「す」「さす」と同様の意味を表
す。

問題8 右の例文を基にして「しむ」の活用を表に
作れ。用言のどの活用と同じか。

問題9 「しむ」はどんな活用形に附くか。例文に
よつて調べてみよう。

「しむ」はすべての動詞に附くほか、形容詞・形容動
詞にも附く。

問題10 次の語に「しむ」を付けてみよう。
動く 見る、あり 死ぬ 來 作業す 樂し 高し
靜かなり 堂々たり

○口語の文章の中に、この「しむ」を用ひることがあ
る。その場合には「しむ」は下一段に活用する。

一艘の ボートに 分乗せしめた。
心臓を 寒からしめる。

「六」る、らる

この助動詞は、口語助動詞「れる」「られる」に當る
ものである。

(イ)工夫に 心を 奪はる。

幾たびか ことわりたれども、許されず。

春は 堂宇 霞に 包まれて、さながら

夢のごとし。

柿右衛門風と 呼ばれる 陶器を 作り出
せり。

人に せしめられど 願はず。

頼みがひ ある 者と 思はれよ。

(ロ)多年の 苦心 報いらる。

一藝 ある 者は、必ず 擧げ用ひられしむ。

道は 夜來の 雨に 清められたり。

當時の 宅庭などは、今日も そのまゝ、

保存せらるるなりとぞ。

人に 賞讃せらるれど、いさゝかも 誇らず。

人に 信賴せられよ。

問題11 右の例文を基にして「る」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

問題12 「る」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

問題13 右の例文に於いて、「る」の附いてゐる動詞は何活用か。「る」の附いてゐるのは何活用か。

「る」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。次の(一)の類の動詞には「る」が付き、(二)の類の動詞には「らる」が附く。

(一) 焼く 移す 打つ 養ふ 怪しむ 送る 死ぬ あり

(二) 見る 用ふ 閉づ 預く 慰む 蹴る 來 罪す

問題14 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何

問題16 次の「らるる」を區別せよ。

(一) 世界に 名を 知る。

(二) 廣く 用ひらる。

「へ」尊敬の意味を表すには、助動詞の「る」「らる」を用ひるほかに、尊敬の意味を含んだ特別の動詞を用ひることがある。その主なものは、次の通りである。

召す 思し召す きこしめす しろしめす

たまふ のたまふ います まします おはす

おはします 仰す

このうち「召す」「思し召す」「きこしめす」「しろしめす」「仰す」などには、更に尊敬の助動詞「る」「らる」の附くことがある。

「れ」「す」「さす」「しむ」が尊敬の意味を表すことがある。この場合は大抵「らる」「たまふ」のやうな尊敬の意味をもつ語と共に用ひられる。

ほのかに 承れば、この 御苑は、明治天皇

御みづから 森の 下道、下草まで 何くれと

御仰せ ありて、自然の まゝに 作らせたま

活用か。

○サ變動詞に於いては、その未然形に「る」が附いて「鍛錬せらる」「うはさせらる」となるのが普通であるが、「鍛錬さる」「うはさせさる」のやうな言ひ方をすることもある。

〔七〕(一) 一口に 十里は 行かるべし。

この 開所、たやすくは 越えられず。

(二) 母の 便りのみ 待たる。

ありし 日の 姿 思ひ出でらる。

(三) 父上 外より 歸らる。

先生も 参加せらる。

右の(一)(二)(三)の「る」「らる」は、それ／＼違つた意味を表す。又、前に挙げた「る」「らる」も、これらとは意味が違つてゐる。

問題15 一體どう違ふか。口語の「れる」「られる」のことを参照して考へよ。

これらの「る」「らる」は、前に挙げた「る」「らる」と、活用も續き方も同じである。但し、(一)及び(二)の場合の「る」「らる」には命令形がない。

ひ、昭憲皇太后 かぎりなく めでさせたまひて、しば／＼ 行啓 あらせられたりとぞ。

御徳を 後の 世に 垂れさせらる。

陛下 行幸せしめたまふ。

〔十〕す

色合ひも さだかならず。

急がずば ぬれざらましを 旅人の あとより

晴るる 野路の 村雨。

塵 一つ 残らず なりぬ。

しばし 感じて やまざりき。

思ひも よらぬ 出来事に 驚きたり。

己の 欲せざる ところ、人に 施す こと

なかれ。

境内は さして 廣からねど、木立 ものふり

て いと 神々し。

齡 三十に 満たされど、その 學識 甚だ

深し。

賤しきを そしらざれ。

右のやうに「す」は打消を表す。口語助動詞の「ない」

に當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ざら	ざり	ず	ぬ	ね	ざれ
主な用法	ベ・ムにナル・キ音に連なる切音	ハ・ルに連なる切音	ヒ・シに連なる切音	フ・モに連なる切音	命令の意味で言ひ	

問題17 これに似た活用が用言にあるか。

問題18 「ず」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「ず」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題19 次の語に「ず」を附けてみよう。

(一) 聞く 立つ 見る 起く 蹴る 助く 死ぬ

あり 來 練習す

(二) よし 正し

(三) 静かなり 堂々たり

〔二〕む(ん)

やがて 花 咲かむ。

千萬人と いふとも われ 往かむ。

美しさ たとへむ 方なし。

けられんすれ。

〔三〕じ

喜びの 來たらむ 日も 遠からじ。

かれは 誤りを 重ねじと 誓ひぬ。

右のやうに、「じ」は「む(ん)」に對する打消であつて、推量や意志を表す。口語の「ないだらう」又は「まし」の意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
じ	じ	じ	じ	じ	じ	じ
主な用法		切音	る(時)に連なる切音	る(時)に連なる切音	る(時)に連なる切音	る(時)に連なる切音

○「じ」の連體形及び已然形は、古い時代に用ひられたことがある。

問題23 「じ」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「じ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題24 問題19の例語に「じ」を附けてみよう。

〔三〕まほし

一人 行かまほし。

事の 由は かれこそ 知らぬ。 右のやうに、「む」は推量する意味、又は話し手の意志を表す。口語助動詞の「う」「よう」に當る。

○この「む」は「ん」と發音する。又發音に従つて「ん」と書くことも少くない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む(ん)	む	む	む	む	む	む
主な用法		切音	る(時)に連なる切音	る(時)に連なる切音	る(時)に連なる切音	る(時)に連なる切音

問題20 これに似た活用が用言にないか。

問題21 「む(ん)」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「む(ん)」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題22 問題19の例語に「む(ん)」を附けてみよう。

○「む(ん)」と殆ど同じ意味を表すものに「むす(んす)」がある。現代の文語では殆ど用ひないが、昔の文章には屢々現れる。終止形「むす(んす)」、連體形「むする(んする)」、「已然形「むすれ(んすれ)」、「三形だけがある。 汝が やうなる 者は、いつも 重忠にこそ 助

さまで 見まほしからず。

さほど 行かまほしくば、件なひて 行かむ。

まことに あらまほしく 思はる。

いと 行かまほしかりき。

少しの ことにも 先達は あらまほしきものなり。

かくこそ あらまほしけれ。

右のやうに、「まほし」は希望する意味を表す。この助動詞は、昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし
主な用法	ベ・ズにナル・キ音に連なる切音	ハ・ルに連なる切音	ヒ・シに連なる切音	フ・モに連なる切音	る(時)に連なる切音	る(時)に連なる切音

問題25 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題26 「まほし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「まほし」は動詞に附く。

問題27 問題19の例語に「まほし」を附けてみよう。

〔四〕 まし

早く 知ら^まし^かば、かゝる 不覚は ながら^まし。
 とや。 せ^まし、かくや。 せ^まし。
 この「まし」は、實際さうでない事を假にさうと想像して言ふ場合に用ひる。又「む(ん)」と同様に、口語助動詞「う」「よう」の意味に用ひることもある。「まし」は昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まし	(ませ)	○	まし	まし	ましか	○
主な用法	(連なる)		切言	るひ「時」に下モに連なる		

○上代には「ませ」といふ形があり、「ませば」と用ひられた。

問題28 これに似た活用が用言にあるか。

問題29 「まし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「まし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題30 問題19の例語に「まし」を附けてみよう。

二 文語助動詞の接続と活用(二)

にも附く。

來^まし^か、來^こし^か

又、「き」の終止形は、カ變の動詞の連用形に附くが、連體形・已然形はカ變の未然形に附く。

し^き、せ^ししか

糧 盡きて 草の 根を 食ひ物と し^き。

専心 耕作に 従事せ^しかば、豊かなる 稔りを 得たり。

〔五〕 けり

それより 後、義家は 匡房を 師と して 學び^{けり}。

一座の 人々 これを 聞きて、一度に どつとぞ 笑ひ^{けり}。

し^ばし 待てと 言ひ^{けり}ども、耳を 傾くる 者 ながら^き。

右のやうに、「けり」は過去を表すのに用ひる。口語では「た」がこれに當る。この「けり」は又、咏歎の意

〔五〕 き

一人として 感泣せざるは ながら^き。
 遠く 歐洲に 起りし 事件も、數時間にして 報道せらる。

大いに 治績を 擧げ^しかども、長く その 職に 在る こと 能はざ^りき。

右のやうに、「き」は過去を表すのに用ひる。口語ではこの場合「た」を用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	○	○	き	し	しか	○
主な用法			切言	るひ「時」に下モに連なる		

問題31 これに似た活用が用言にあるか。

問題32 「き」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「き」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題33 問題19の例語に「き」を附けてみよう。

「き」の終止形はカ變の動詞には全く附かない。その連體形・已然形は、カ變の連用形に附くほか未然形

味にも用ひる。

まことの 契りは 親子の 間にぞ あり^{けり}。
 子をば 人の 持つべかり^{けり}ものかな。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○
主な用法	(ズに)	切言	るひ「時」に下モに連なる			

○「けら」は上代に用ひられたが、現在では用ひない。

問題34 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題35 「けり」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「けり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題36 問題19の例語に「けり」を附けてみよう。

問題37 次の「一けれ」を區別せよ。

- (一) 波こそ 高けれ。
- (二) 夢にこそ 見けれ。

〔七〕 め

遂に 目的を 達し^め。

この事 江戸に聞えなば 必ず 悪しかり
なむ。

朱雀門まで 一夜が ほどに 塵灰と なりに
き。

色は にほへど 散りぬるを、わが 世 たれ
ぞ 常ならむ。

平家は 落ちぬれど、源氏は 未だ 入りかは
らず。

右のやうに、「ぬ」は完了、即ち動作又は事件が完結
する意味を表す。口語の「た」に當る場合が多いが、
又「てしまふ」「てしまつた」「やうになる」「やうにな
つた」に當る場合もある。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ぬ	な	ぬ	ぬ	ぬ	ぬれ	(ぬ)
主な用法	ムにキ	ニキ	ニキ	ヒ時	ニドモ	意味(命令)
	連なる	連なる	切	連なる	連なる	意味(命令)

○命令形として古く「ね」といふ形があつた。

はや 船出 して、この 油を 去りぬ。

問題38 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題42 「つ」の活用を表に作れ。用言のどの活用
と同じか。

○命令形は、現代の文語では餘り用ひない。

問題43 「つ」はどんな活用形に附くか。右の例文
によつて調べてみよう。

「つ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題44 問題19の例語に「つ」を附けてみよう。

問題45 次の「つ」を區別せよ。

(一)所持の 品を 捨つ。

(二)見るべき ものは 見つ。

○「行きてけり」「行きてき」の「て」は助動詞「つ」の連
用形であるが、「行きて問ふ」の「て」は助詞である。

【五】 たり

戸ごとに 國旗を 掲げたり。

美名を 今に 傳へたり。

人は 形 有様の 勝れたらむこそ あらまほ
しかるべけれ。

一の木戸口の 邊まで 寄せたりけり。

苦むしたる 岩石 壁のごとく 突き立ちた

問題39 「ぬ」はどんな活用形に附くか。例文によ
つて調べてみよう。

「ぬ」は動詞・形容詞に附く。

問題40 問題19の例語に「ぬ」を附けてみよう。

○古くは、「ぬ」はナ變の動詞には附かなかつたが、今
は附けることもある。

問題41 次の「ぬ」を區別せよ。

(一)日は 没しぬ。

(二)見ぬ 古は 知らず。

(三)智と 徳とを 兼ぬ。

【六】 つ

とかくして 今日も 暮しつ。

たゞいま 行きてむ。

遂に 都を 去りてけり。

ほととぎす 鳴きつる 方を 眺むれば、たゞ

有明けの 月ぞ 残れる。

しばしとてこそ。立ちとまりつれ。

われに 得させてよ。

右のやうに、「つ」は「ぬ」と同様、完了を表す。

り。

大いなる 災害を 受けられども 少しも 屈
せず。

その 修行者をば 暫く さて 置きなれ。

右のやうに「たり」は過去・完了、又は「である」「て
ゐる」の意味に用ひる。即ち口語の「た」に當る。

問題45 「たり」の活用を表に作れ。用言のどの活
用と同じか。

用と同じか。

○命令形は、現代の文語では用ひない。

問題47 「たり」はどんな活用形に附くか。例文に
よつて調べてみよう。

「たり」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かな
い。

問題43 問題19の例語の(一)(二)に「たり」を附けてみ
よう。

【七】 たし

一日も 早く 故郷に 歸りたし。

歸りたくば 速かに 出發せよ。

父母に 逢ひたからむ。

御目に かゝりたく 存じ候。

山に 登りたかりき。

家に ありたき 木は 松 櫻。

定めて 行きたかるべし。

舞をも 見たけれども、それは 次の こととせむ。

右のやうに、「たし」は自身の希望する意味を表す。

口語の「たし」に當る。

問題49 「たし」の活用を表に作れ。用言のどの活

用に似てゐるか。

問題50 「たし」はどんな活用形に附くか。例文に

よつて調べてみよ。

「たし」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かな

問題51 問題19の例語の(一)に「たし」を付けてみ

(三) けむ(けん)

昔の 友は いづち 行きけむ。

ここに 住みけむ 人の 心 ゆかし。

(三) べし

三 文語助動詞の接続と活用(三)

人々の 心の うち、さこそは 嬉しうも また あはれにも ありけむ。

右のやうに、「けむ(けん)」は、過去の事を推測する意味を表す。口語の「ただらう」「たであらう」の意味に用ひる。この語は現代の文語では普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
けむ(けん)	○	○	けむ(けん)	けむ(けん)	けむ(けん)	○
主な用法			切言	ひ時	下モ	
			る連なる	る連なる	る連なる	

問題52 これに似た活用が用言にないか。

問題53 「けむ(けん)」はどんな活用形に附くか。例文に

よつて調べてみよ。

「けむ(けん)」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題54 問題19の例語に「けむ(けん)」を付けてみよ。

問題55 次の「けむ」を區別せよ。

- (一) 何事か ありけむ。
- (二) 汝に 授けむ。

(一) 會議に 参加する 人員は 百人を 超ゆ

べし。

(二) 明日 必ず 参上 致すべし。

(三) 一念は 岩をも 通すべし。

(四) 國民として 盡くすべし 道なり。

(五) 明朝 八時に 集合すべし。

右のやうに、「べし」は、口語の「う」「よう」のやうに推量や意志を表すほかに、「ことができ」(可能)、「なければならぬ」(當然)、「なさい」(命令)などの意味を表す。

「べし」は次のやうに活用する。

もし 行くべくば 直ちに 行かむ。

心は 常に 勞すべし、苦しむべからず。

いつまでも かくのごとき ものに 満足すべくも ありず。

つとに 正すべかりし ものなり。

数十年の 間に 驚くべき 發達を 遂げたり。

未だ 幼かるべけれど、その 巧みさ 言はむ方なし。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
べし	べから	べかり	べし	べき	べけれ	○
主な用法	バ・スに連なる	ナル・キ音に連なる	切言	ひ時	下モに連なる	

問題56 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

「べし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題57 次の動詞に「べし」を付けてみよ。どんな活用形に附くか。

救ふ 知る 見る 仲ぶ 蹴る 受く 死ぬ 來運動す

問題58 ラ變・形容詞・形容動詞に「べし」を付けてみよ。どんな活用形に附くか。

あり 高し 美し 丁寧なり 決然たり
○「べし」の連體形「べき」は、口語の文章に於いても用ひられることがある。
これこそ、われらの 行くべき 道では なからうか。

【三】まじ

- (一) 世に かほどの 愚者は あるまじ。
- (二) われは 再び かれに 會ふまじと 決心せり。
- (三) 言ふまじき ことを 言ひ、行なふまじき ことを 行なふ。
- (四) ゆめ 忘るまじきぞ。

右のやうに、「まじ」は推量・意志を表すほかに、「し」てはならぬ(當然)、「するな(禁止)などの意味を表す。大體「べし」の打消と見ることが出来る。口語の「まし」に當る。

「まじ」は次のやうに活用する。
 參るまじくば その ゆゑを 申せ。
 さる 事 あるまじく 思はる。
 人には 言ふまじかりけり。
 學問は いかなる 者にも 劣るまじ。
 いかにも かなふまじき 由 答へたり。
 冬枯れの 景色こそ。 秋には をさ／＼ 劣るまじけれ。

山門 高き 松風に 昔の 音や こそらむ。
 みづからは いみじと 思ふらめど いと 口惜し。
 右のやうに、「らむ(らん)」は現在の事實に就いて想像する語で、口語の「だらう」又は「であらう」の意味に用ひる。この語は現代の文語では普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らむ	○	らむ	らむ	らむ	らめ	○
(らん)	○	(らん)	(らん)	(らん)	らめ	○
主な用法		切言	連なる	時	に	下モに

問題63 これに似た活用が用言にないか。
 問題64 「らむ(らん)」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。
 「らむ(らん)」は、動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題65 問題57の例語に「らむ」を付けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。
 問題66 問題58の例語に「らむ」を付けてみよ。ラ變・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。
 問題67 次の「らむ」を區別せよ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まじ	まじく	まじかり	まじ	まじき	まじけれ	○
主な用法	連なる	にナル・キ言	切言	連なる	時	に

問題59 この活用は、用言のどの活用形に似てゐるか。

問題60 「まし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。
 「まし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題61 問題57の例語に「まし」を付けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。
 問題62 問題58の例語に「まし」を付けてみよ。ラ變・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

【四】らむ(らん)

- (一) 途中には 旅店 あらむ。
- (二) など しか 言ふらむ。

【五】めり

はや 夜も 明くめり。
 この 人をなむ 聖人とは いふめる。
 何事をか 言ふめれど、聲 低くて 聞えず。
 右のやうに、「めり」は「様子だ」と大體を推量して言ふ意味に用ひる。「めり」は昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○
主な用法		連なる	切言	連なる	時	に

○連用形「めり」は、これに「し」「しか」の附いたものが稀に用ひられただけである。

問題68 この活用は、用言のどの活用形に似てゐるか。
 問題69 「めり」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。
 「めり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變・形容詞・形容動詞とは、その附く

活用形を異にする。

問題70 問題57の例語に「めり」を付けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。

問題71 問題58の例語に「めり」を付けてみよ。ラ變・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

〔二六〕

四月より 級長と なれり。

その 翁、頭に 雪を いたゞけり。

時計は 絶えず 時を 刻めり。

頂上に 達せるは 十一時なりき。

屏風に 描ける 繪の 美しさ 言はむ 方なし。

右のやうに、「り」は「たり」と同じやうに、過去・完了、又は口語の「てゐる」「である」の意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)
主な用法	(ムに) 連なる	(キに) 切言	(ヒ) 時	(ドモに) 連なる	(イ) 意味	(イ) 命令

○未然形・連用形・已然形・命令形は、現代の文語に

こと 能はず。

岩壁は 屏風のごとく わが 行く手を さへ ぎる。

汽車は 風光 繪のごとき 湖畔を 走る。

最近の 暑さは 近年 稀にして、昨日のごときは 實に 三十四度に 達せり。

右のやうに、「ごとし」は他にたとへて言ふのに用ひ、又、不確かな断定を表すのに用ひるが、そのほか、例示に用ひることがある。口語の「やうだ」に當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○
主な用法	(ムに) 連なる	(キに) 切言	(ヒ) 時	(ドモに) 連なる	(イ) 意味	(イ) 命令

○「ごとし」には、已然形・命令形がない。

○語幹「ごと」が、連用形又は終止形のやうに用ひられることがある。

月のごと、日輪 ほのかに 浮かぶ。

かつこう、かつこう、かんと鳥、こだまのごと、

夢のごと。

問題76 この活用は、用言のどの活用に似てゐる

文法篇

は用ひない。

問題72 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題73 「り」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「り」は四段活用 of 已然形と、サ變の未然形だけに附く。

問題74 次の語に「り」を付けてみよ。

(一) 取る 書く 出す

(二) 努力す 勉強す

問題75 次の「めり」を區別せよ。

(一) 船は 次第に 沈むめり。

(二) 船は 水中に 沈めり。

四 文語助動詞の接続と活用(四)

〔二七〕

喜びを 歌ふがごとく、行く われを 迎ふる

ごとし。

被害は 軽からざるがごとし。

果して 君の 言のごとくば、予は 默する

か。

問題77 右の例文では、「ごとし」はどんな品詞に附してゐるか。

「ごとし」は動詞の連體形、又はこれに助詞「が」の附したもので、又は體言に助詞「の」の附したものに附く。

〔二八〕 「ごとなり」は「ごとし」に「なり」の附したものである。

けはしき 坂を 登る こと、平地を 行くが ごとくなり。

義捐金 山のごとくに 集る。

禍福は あざなへる 繩のごとくなれば、逆境に 立てりとして 深く 歎くべきに あらず。

「ごとし」に缺けてゐる已然形の代りに、この「ごとなれ」が用ひられる。

〔二九〕

雨 降るらし。

雨 降るらしく 見ゆ。

雨の 降るらしき 空あひなり。

右のやうに、「らし」は推定する意味を表す。口語の

「らし」がこれに當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	らしか	らしく	らし	らしき	○	○
主な用法	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切

問題 78 これに似た活用が用言にないか。

問題 79 「らし」ほどの活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「らし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 80 問題 19 の例語に「らし」を附けてみよ。

「らし」は又、體言にも附く。

明日は 雨天らし。

あなたに 寺らしきもの 見ゆ。

【110】この「らし」は、古くは次のやうに用ひた。

み雪 降る 冬は 今日のみ、鶯の 鳴かむ 春へは 明日にし あるらし。

奥山の 雪消の 水ぞ、今 増さるらし。

年月の ゆき ふりゆけば、草も 木も 老いこそ

才能 ある 學徒なれども、なほ 努力 十分ならず。

右のやうに、「なり」は口語の斷定の「だ」と同じ意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なり	なれ	○
主な用法	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切	速なるに速なる切

問題 82 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題 83 右の例文では、「なり」はどんな品詞に附いてゐるか。

「なり」は體言、又は用言の連體形に附くのが普通である。

問題 84 次の語に「なり」を附けてみよ。

- (一) 繪畫 學者 汽車 汽船
- (二) 行く 見る 出づ 起く 蹴る 死ぬ 來 爲
- あり 早し 悲し のどかなり 潑刺たり

○「なり」の連體形「なり」は、「に」あるの「意味又は」と

すらし。白く 見ゆれば。

活用は、次のやうにまとめられる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	○	○	らし	(らし)	(らし)	○
主な用法		切音	切音	切音	切音	切音

○連體形は「ぞ」の結び、已然形は「こそ」の結びとしてのみ用ひられた。

問題 81 この「らし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

この「らし」は動詞の終止形に附く。但し、ラ變の動詞には連體形に附く。

【111】なり

若き 人に 一見ならはせむとて かくは するなり。

こは まことに 驚くべき ことならすや。

孔子は 正義の 念 強き 人なりき。

實朝は 頼朝の 子にして 鎌倉右大臣といふ 歌人なり。

よき 辭書なる こと 明らかなり。

いふの意味に用ひることがある。

大和なる 法隆寺。

顔なる 者 あり。

○「ごとし」に「なり」が附く場合は、連體形に附かずに、その連用形に附いて、「ごとくなり」となる。

【112】

「なり」は又、次のやうに用ひることがある。

秋の 野に 人まつ 虫の 聲 すなり。

秋風に 初雁がねぞ きこゆなる。

即ち動詞の終止形に附いて詠歎の意味を表す。

【113】たり

君は わが 良友たり。

常に よき 生徒たらざるべからず。

われ かつて この 學校の 生徒たりき。

人としての 道を 盡くすべし。

人の 友たる 者は、誠 なかるべからず。

身は 一國の 宰相たれども、その 位置に 誇る 色 なし。

従順にして 勇敢なる 生徒たれ。

右のやうに、「たり」も「なり」と同様、口語の斷定の

「だ」と同じ意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たり	たら	たり	たる	たれ	たれ	たれ
主な用法	速なるに	キ・シテ音に連なる切	ひ「時」に連なる切	速なるに	命令の意切る言ひ	

問題 85 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題 86 右の例文では、「たり」はどんな品詞に附いてゐるか。

「たり」は體言だけに附く。

【語】(一)こは われらの 學校なり。

われらは よき 生徒たらむ。

(二)その 建築は 甚だ 美麗なり。

前途は 洋々たらむ。

(一)は體言に、口語の「だ」に當る助動詞「なり」「たり」が附いたものである。(二)は形容動詞である。この二者を混同してはならない。

問題 87 次の「たり」を區別せよ。

(一)日本第一の 名醫たり。

問題 91 用言や助動詞以外の語に附くことのできるのは、どの助動詞か。

【語】既に調べて来たやうに、助動詞にはいろ／＼活

用の違ったものがある。故に助動詞は、その活用の仕方に基づいて、幾つかの種類に分けることができる。

問題 92 (イ)動詞と同じ活用、又はこれに準ずる活

用をするものはどれか。それは動詞のどの種類の活用と同じか。

(ア)形容詞と同じ活用、又はこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ハ)形容動詞と同じ活用、又はこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ニ)用言とは違つた特殊の活用をするものはどれか。

(ホ)語形變化のないものはどれか。

【語】尊敬・謙讓の意味をもつてゐる動詞、又は「あり」の意味を丁寧に言ふ動詞を、助動詞のやうに用ひることがある。

(一)御衣を たまふ。 殿下 臨場したま

文法篇

(一)その 決意・斷乎たり。

(二)どうと 倒れたり。

問題 88 次の「なり」を區別せよ。

(一)水は 液體なり。

(二)風 冷やかなり。

【語】文語に用ひる助動詞は、右に挙げた通りである。さうして、以上は、どんな種類の語又はどんな活用形に附くかによつて、順序立てたものである。

問題 89 (イ)用言だけに附くのは、どの助動詞か。

(ロ)動詞だけに附くのは、どの助動詞か。

(ハ)動詞のほか形容詞にも附くことのできるのは、どの助動詞か。形容動詞に附く

ことのできるのは、どの助動詞か。

問題 90 (イ)用言の未然形に附くのは、どの助動詞か。

(ロ)連用形に附くのは、どの助動詞か。

(ハ)終止形に附くのは、どの助動詞か。

(ニ)連體形に附くのは、どの助動詞か。

(ホ)已然形に附くのは、どの助動詞か。

(一)歌を 奉る。

文を まゐらす。

(二)なにがしも 候ふ。

ここに 侍り。

(三)されば、今 この 馬 ゆめにも 求め 得べし

とは 思はざりき。

問題 93 左の文中の傍線を附けた助動詞の用法を説明せよ。

(一)されど、これは わらは この 家に まゐりし

時、この 鏡の 下に 父の 入れたまひて、ゆ

めゆめ、世の つねの ことに 用ふべからず。

汝の 夫の 一大事 あらむ 時に まゐらせよ

とて、たまひき。

問題 94 左の文から助動詞を抜き出し、その用法

を説明せよ。

深く 頼み奉る。

幼主を たすけお

わららも 既に

無事に 暮し居り

候。

聞き侍り。

わららも 既に

候。

聞き侍り。

わららも 既に

候。

聞き侍り。

白河樂翁公、年十二にて田安邸にありし頃、藤布鳥居坂の戸川内膳の邸宅より火起り、大火といふにあらざれども、焼死せし者多かりしかば、「この火事は人の命をとりむ坂これより上のとがはないせん。」と落首せる者ありけり。近侍の人々、「いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まむには、さは言はじ。」とありければ、人々「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらすに、「第四の句を『怪我の事なり。』とすべきなり。」と仰せらる。一句にて一首の意味を全く顛倒せしめ、過ちのやみがたきに出づるを明らかにせられしは、誠に驚くべきなり。

問題 95 次の文は誤りがあつたら正せ。

- (一) この所に塵芥拾つるべからず。
- (二) 雨漸く暗れり。
- (三) かれは承諾するまじ。
- (四) 奮闘ししかども、遂に等外に落ちたりき。
- (五) 二人ともよく勉強して居られる由、安心致し候。

五 文語助詞の種類と用法

分類すると、口語の場合と同様、大體四種類になる。「三」文語の助詞は、口語のとは違つた語を用ひるところがあり、又同じ語を用ひても、意味や用ひ方の違ふものがある。

【四】第一類

- が
- 〔一〕乗手が 用心するならば、馬も けがは なくなるべし。
 - 〔二〕梅が 香に のつと 日の 出る 山路かな。
 - 〔三〕右のやうに「が」は、主語を示すほかに、文語では又、體言に連なる修飾語を作るために用ひることがある。
 - 〔四〕白々と あんずの 花の 咲き出でて、今年も 春の 日ざしと なりぬ。
 - 〔五〕こは 友よりの 文よ。
 - 〔六〕かさながら 珊瑚珠の 輝くに 似たり。
 - 〔七〕右のやうに「の」は、體言に連なる修飾語を作るほか

- 〔一〕花 散る。 [學力 とみに 増す。]
 - 〔二〕花を 散らす。 [學力を 増す。]
 - 〔三〕かれは 行かず。汝は 行け。
 - 〔四〕かれは 行かざれど、汝は 行け。
 - 〔五〕風 吹き出でたり。
 - 〔六〕風さへ 吹き出でたり。
 - 〔七〕こは 汝の 本なり。
 - 〔八〕こは 汝の 本なりや。
 - 〔九〕勇 本を 正雄に 與ふ。
 - 〔一〇〕正雄 本を 勇に 與ふ。
- 問題 1 右の例文に就いて、助詞がどのやうな働きをしてゐるか、考へてみよう。
- 問題 2 右の例文の助詞は、どんな品詞に附いてゐるか。

〔三〕 文語の助詞も、口語の助詞と同じやうに、自立語に附いてその語と他の語との關係を示し、或はこれに一定の意味を添へる。故に、助詞に於いては、どういふ語に付き、どういふ語にかゝつて行くかを明らかにすることが大切である。この點から助詞を

- に、主語を表すのに用ひることが少くない。
- 〔一〕書を 讀む。 色の 美しきを 賞す。
 - 〔二〕女の 外國に 赴くを 送る。
 - 〔三〕野を 過ぐ。 空を 飛ぶ。
 - 〔四〕早くも 列を 離るる もの、あり。
 - 〔五〕田舎に 住む。 朝 五時に 起き出づ。
 - 〔六〕東京に 大地震 あり。
 - 〔七〕京都に 到着す。
 - 〔八〕かれは 科學者に なれり。 灰燼に 歸す。
 - 〔九〕見舞に 行く。 筆 買ひに 行く。
 - 〔一〇〕雨に 降らる。 弟に 寫さしむ。
 - 〔一一〕右のやうに、「を」は口語と格別の違ひはない。
 - 〔一二〕北へ 飛ぶ。 京都へ 去る。
 - 〔一三〕右のやうに「へ」は、文語では主として方角を示すために用ひる。

「友と」遊ぶ。

「氷」解けて「水」なる。

「これ」を「歌枕」といふ。

「叔父」と「叔母」とを「訪ふ」。

右のやうに、「と」は口語と格別の違ひはないが、(四)

のやうに對等の資格で並ぶ體言を結びつける場合には、文語では「と」を一々各語の下に附けるのが本格である。しかし誤解を招くおそれのない場合には、最後の「と」をはぶくこともある。又(三)のやうに、引用文などを受ける場合には、その終りの用言又は助動詞の終止形を連體形にすることがある。

終日 業務を「取り扱はしむ」といふ。

より

「鐵より」堅き「かひな」あり。

「泣くより」ほかの「ことぞ」なき。

「大阪より」歸る。會は「六時より」始る。

問題3 右の(三)の例文を口語に改めよ。

右のやうに、「より」は口語と同じ意味を表すほかに、口語の「から」の意味にも用ひる。

「七」第二類

ば

平安時代に於ける國文學の發達は、假名の發生に「負ふ」ところ多し。

(甲) 敦島の「やまと心」を「人」とはば、「朝日」に

ほふ「山さくら花」。

「近くば」寄つて、「目にも」見よ。

(乙) 風「吹けば」、波「立つ」。

「遠き」慮り「なければ」、近き「憂ひ」あり。

今日は、雨「降れば」外出せず。

問題5 (甲)の例文では、「ば」は用言のどんな活用形に附いてゐるか。(乙)の例文ではどうか。

問題6 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、文語では、「ば」は、未然形に附くものと已然形に附くものがある。未然形に附いた場合は、或る事がらを假定して、それを條件とすることを表す。已然形に附いた場合は、確定した事がらを條件とすることを表すほか、「から」の

にて

「筆」にて「書く」。

「庭」にて「遊ぶ」。

「病氣」にて「休む」。

右のやうに、「にて」は口語の「で」に當る。

問題4 次の「にて」は、この「にて」と同じか。

父は「晝家」にて、子は「詩人」なり。

「五」この類の助詞は、主として體言に附いて、その體言が、同じ文中の他の語に對して、どんな關係に立つかを示すものである。これを格助詞といふことがある。

「六」文語では、「をして」「を以つて」「に就いて」「によつて」「に於いて」「に於ける」などの言葉を、第一類の助詞と同様に用ひる。

弟をして「先發せしむ」。

かれの「沈着」なるは「これ」を以つて「知る」べし。

わが「國」の「經濟」に就いて「語らむ」。

無線電信によつて「危急」を「報ず」。

會議は「東京」に於いて「開催」す。

で」の意味をも表す。

とも

人「騒ぐ」とも「いさ」かも「動ぜず」。

「いかに」複雑なりとも「解決」せざる「こと」あらじ。

「いかに」心は「堅く」とも、身は「鐵石」に「あらず」。

「苦しく」とも「忍ぶ」べし。

問題7 右の例文で「とも」は、動詞のどんな活用形に附いてゐるか。形容動詞にはどうか。

問題8 右の例文を口語に改めよ。

「とも」は動詞・形容動詞の終止形、形容詞の未然形「く」「しく」に附く。又、或る種の助動詞にはその終止形に、或る種の助動詞にはその未然形に附く。口語の「ても」の意味に用ひる。

○古くは、「とも」の意味で「と」を用ひたことがある。

どとも

繪に「描く」と「筆」も「及ばじ」。

口手を分ちて探りたれど(ども)、遂に發見し得ざりき。

近けれど(ども)車にて行きぬ。

口樹 静かならんと欲すれども風やまず、

子 養はんと欲すれども親待たず。

呼べど 答へず、さがせど見えず。

問題 9 右の例文で「と」「ども」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

問題 10 右の例文を口語に改めよ。

「と」「ども」は、用言及び助動詞の已然形に附いて、口語の「けれども」又は「ても」の意味に用ひる。

○なほ、「とも」「ども」の代りに、「も」を用ひることがある。

何らの事由あるも、議場に 入る ことを

許さず。

日没まで 搜索せしも、遂に 發見する こと

能はざりき。

問題 11 右の文を口語に改めよ。

問題 14 次の「一」を「を」區別せよ。

(一) 苦しきを 忍ぶ。

(二) 年 なほ 若きを、いかで さる 任に 堪へむ。

問題 15 右の例文で「が」「に」「を」は、用言又は助動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

問題 16 右の「が」「に」「を」の例文を口語に改めよ。

「が」「に」「を」は、さづれも用言及び助動詞の連體形に附いて、口語第二類の助詞「が」「の」「に」の意味に用ひる。

て

雨 降りて、地 固まる。

火焰を くつつて 消防に 努む。

赤くて 大きな 花。

四海 波 静かにて、天が下 穩かなり。

かれは 小説家にて、且つ 俳人なり。

問題 17 右の例文で「て」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

「て」は動詞の連用形(或はその音便の形)、形容詞

文法篇

が

日暮るるまで 待ちたるが、遂に 友は 來たらざりき。

保己一は 五歳の 時 めくらと なりしが、後には 名高き 學者と なれり。

問題 12 次の「一」が「を」區別せよ。

(一) 冬に 咲くが おもしろきなり。

(二) ここ かして 授したるが、見えざりき。

に

雨 激しきに 出で 行きけり。

未だ 一月も たゞざるに、かの 畫師は 突

然 歸り來たれり。

問題 13 次の「一」を「に」區別せよ。

(一) 言はぬは 言ふに まさる。

(二) わざく 訪ひしに 不在なりき。

(三) 友は 去りにき。

を

かくとは 思はざりしを、さても 嬉しき 心かな。

の連用形「く」「しく」(或はその音便の形)、形容詞ナリ活用の連用形「に」に附く。又、助動詞の連用形に附く。又、この「て」は次のやうにも用ひられる。

國に 歸らんとて 出發せり。

昔 天竺に 祇園精舎とて 名高き 寺ありき。

して

山 高くして 白雲 峯を 埋め、谷 深くし

て 萬丈の 青岩 道を さへぎる。

氣候 溫和にして、産物 豊かなり。

悠然として、追らず。

問題 18 右の例文で「して」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

「して」は、形容詞の連用形「く」「しく」形容詞の連用形「に」「と」に附く。又、或る種の助動詞の連用形に附く。

て

寝も せで 夜を 明かしぬ。

病 快からで 困じぬ。

問題19 右の例文で「で」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

問題20 右の例文を口語に改めよ。

「で」は動詞及び形容動詞の未然形、形容詞の未然形「から」「しから」に附く。又、助動詞の未然形に附く。助詞「て」に打消の意味が加つたもので、口語の「なすで」に當る。

55

讀みつつ 書く。 泣きつつ 語る。

問題21 右の例文で「つつ」は、動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

問題22 右の例文を口語に改めよ。

「つつ」は動詞及び或る種の助動詞の連用形に附いて、口語の「ながら」の意味に用ひる。

○なほ、「處」間のやうな名詞が、候文などでは第二類の助詞のやうに用ひられることがある。

久しく 病氣にて 引き籠り居り候間、今回、全快 致し候間、御安心 下されたく 候。

「ハ」この類の助詞は用言や助動詞に附いて接続詞の

やうに、上の語の意味を、下の用言又は用言に準ずるものに續けるものである。これを接続助詞といふことがある。

「九」第三類

は

鯨は 魚には ならず。

美しくは 見ゆれど、欲しとは 覺えず。

知りては あれど、言はぬなり。

も

口老いも 若きも 喜ぶ。

口老いも 知らず、 寒くも なし。

右のやうに、「は」「も」は口語と格別の違ひはなし。

ぞ

なごり なく 散るぞ めでたき。

風の 音にぞ 驚かれぬる。

さては 汝の ためには よき 相手ぞ。

なむ(なん)

柿本人麻呂なむ 歌の 聖なりける。

われ 鶯に 劣らまじやは。

誰か(は) これに 感泣せざらむ。

花は 盛りに、月は くま なきをのみ 見るものかは。

こそ

底ひ なき 淵やは 騒ぐ。山川の 淺き 瀬にこそ あだ波は 立て。

汝は、聞きしにも、似ず 手こそ 荒けれ。

「こそ」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受けて文を結ぶ時は、必ずその已然形を用ひる。

この「こそ」は、特に事物を取り立てて言ふのに用ひる。

右のやうに、「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」を受けて連體形で文を結び、「こそ」を受けて已然形で文を結ぶのを、**係結の法則**といふ。さうして、右

のやうに用ひられる「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」「こそ」に係りの助詞といふことがある。

だに

塵 一つだに なし。 手にだに 取らず。

か

誰か ある。

かの 扇を 射落す 者は なきか。

「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受けて文を結ぶ時は、必ずその連體形を用ひる。「ぞ」「なむ(なん)」は強く指して言ふのに用ひ、「や」「か」は疑問の意味を表す。

又、「ぞ」「や」「か」は、文の終りにも用ひる。「ぞ」は體言又は用言及び助動詞の連體形に、「や」「か」は用言及び助動詞の終止形に、「か」は用言及び助動詞の連體形に附く。「や」「か」は又、反語を示す時がある。この場合には、「やは」「かは」となることがある。

空しく 月日をや(は) 過すべき。

散る 花の 鳴くにし とまる ものならば、

問題 23 右の例文を口語に改めよ。

す

犬す。思を 知る。

見るにすら 目くるる 心地す。

問題 24 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、「だに」「すら」は、口語の「さへ」「でも」などの意味に用ひ、軽いものを擧げて、それより重いものを推測させるのに用ひる。

さ

雨 降り、風さへ 吹きぬ。

残る 一人子にさへ 別れたり。

右のやうに、「さへ」は口語の「までも」の意味に用ひる。

し

花をし 見れば 物思ひも なし。

右のやうに、「し」は意味を強めるのに用ひる。

問題 25 次の「し」を區別せよ。

(一) 咲かず なりにし 櫻。

(二) 時に 范蠡 なきにしも あらず。

ことなり。

右のやうに、「まで」「など」は口語と格別の違ひはない。「まで」は動作・作用などの及ぶ限度を示し「など」は例示するのに用ひる。

【10】この類の助詞には、體言や用言、その他いろいろの語に附いて、副詞のやうに下の語にかゝつて行く用法がある。これを副助詞といふことがある。

【11】第四類。

な

ゆめ 忘るな。 いたく 罪 作りたまふな。

な…そ

な行きそ。 な忘れそ。

問題 28 例文で「な」及び「な…そ」の「そ」は、動詞

のどんな活用形に附いてゐるか。

右のやうに、「な」「な…そ」は禁止の意味を表す。

「な」は動詞及び或る種の助動詞の終止形に附く。

但し、ラ變の動詞には、その連體形に附く。

女々しくは あるな。

「な…そ」の「そ」は、動詞及び或る種の助動詞の連

文法篇

問題 26 次の「し」を區別せよ。

(一) 海は 見えざりしか。

(二) 海こそ 見えざりしか。

のみ

かれのみ 喜ばざる はず なし。

残れるは これのみなり。

問題 27 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、「のみ」は口語の「だけ」「ばかり」の意味に用ひる。

ばかり

月影ばかり 昔に 變らず。

巾 五尺ばかりの 小川 あり。

右のやうに、「ばかり」は口語の「だけ」又は「ほど」の意味に用ひる。

まで

東京まで 行く。

など

繪など 描きて 遊ぶ。

家 貧しくして 苦しむなどは 世の 常の

用形に附く。但し、カ變・サ變の動詞には、その

未然形に附く。

なこ(來)そ。 なせ(爲)そ。

ばや

行きて 取らばや。

今 しばし 命 あらばや。

問題 29 右の例文で「ばや」は、どんな活用形に附

いてゐるか。

右のやうに、「ばや」は自己に關した事からに就いての希望を表す。動詞及び或る種の助動詞の未然形に附く。

なむ(なん)

いま 一たびの 御幸 待たなむ。

雲だにも 心 あらなむ。

もろこしも 天の 下にぞ ありと 聞く。照

る 日の 本を 忘れざらなむ。

問題 30 右の例文で「なむ(なん)」は、用言及び助

動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

右のやうに、「なむ(なん)」は動詞・形容詞及び或

種の助動詞の未然形に附く。他に對してあつらへ望む意味を表す。

○この「なむ(なん)」を係りの助詞として用ひる「なむ(なん)」と區別するために、願望の「なむ(なん)」と「なむ」がある。

問題31 次の「なむ」を區別せよ。

- (一) 歸らなむ。
- (二) 歸りなむ。
- (三) 夢のやうになむ。

がな

昔を今に ます よしもがな。

右のやうに、「がな」は希望を表すもので、助詞「も」に附くことが多い。

かな

けなげなる をのこかな。

富士 ひとつ うづみ 残して 若葉かな。

あゝ、悲しきかな。

右のやうに、「かな」は體言、又は用言及び助動詞の連體形に附いて感動の意味を表す。

の語に付き、主として文の終りにあつて、疑問・禁止・詠歎・感動などを表すものである。これを終助詞といふことがある。この類の助詞のうち、「な」「ばや」「なむ」「がな」「かし」などは、現代の文語では普通には用ひない。

問題32 (イ) 體言又は體言に準ずるものだけ附く

助詞には、どんなものがあるか。

(ロ) 用言や助動詞にだけ附く助詞には、どんなものがあるか。

問題33 次の文に誤りがあつたら正せ。

- (一) 捨ておけば、ほどなく生き返らむ。
- (二) かれこそ第一の物理學者なりし。
- (三) 人や出づと待ち受けたり。
- (四) 一粒の米さへ得られざる所なり。
- (五) 海卷きあぐる龍巻も、起れば起れ、驚かじ。

【三】 今まで調べて来たことによつて、文語では品詞が幾つあるかといふこと、單語には活用の有るものと無いものがあること、活用の有る單語はどのや

○この「かな」は古くは「かも」と言つた。

かし

幸 あれかしと 祈る。 來ても 見よかし。
右のやうに、「かし」は言ひ切つた形に附いて意味を強めるのに用ひる。

や

あな、嬉しや。 行けや、行け。

いでや、目に 物 見せむ。

いかに 梶原殿。この 川は 西國一の 大川ぞや。

古池や、蛙 とびこむ 水の 音。

な

蟬の 聲 聞けば 悲しな。

よ

少納言よ、香爐峯の 雪は いかならむ。

その 芽の みづくしき 綠よ。

右のやうに、「や」「な」「よ」は共に感動の意味を表す。

【三】 この類の助詞は、體言や用言、その他いろ／＼

うに活用するかといふこと、單語には自立語と附屬語とがあつて、自立語と附屬語とが結びつく時どのやうな結びつき方をするかといふことなどが、わかつたはずである。

K240.8-3

語 文				語 口				體 言 仁
類四第	類三第	類二第	類一第	類四第	類三第	類二第	類一第	
								用 言 仁
								已 假 仁
								然 定 形
								合 命 形

（第二卷）口語及び文語助詞接續表